

## 読書ノート

小池和男／洞口治夫 編

### 『経営学のフィールド・リサーチ』

——「現場の達人」の実践的調査手法

中島 敬方

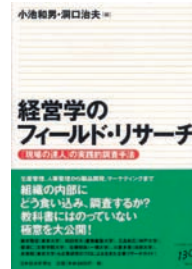
(株式会社クロスオーバー常務取締役)

1冊の本をまえにして考え込んでしまった。今年1月下旬に、新会社立上げのための出張会議の合間に読もうと思購入した『経営学のフィールド・リサーチ』（日本経済新聞社）である。本書は、小池和男・洞口治夫両氏の編集のもとに、「プロローグ 経営学のフィールド・リサーチ（小池和男）」、「第1章 私のフィールド・リサーチ遍歴——農業水利から製品開発まで」（藤本隆宏）、「第2章 マーケティング研究における取材の技法——成功と失敗の軌跡」（和田充夫）、「第3章 部分と全体——ケース・スタディをどう使うのか」（三品和広）、「第4章 参与観察——製茶産産を体験して」（櫻澤仁）、「第5章 エスノグラフィーで現象に迫る——暴走族・現代演劇から経営へ」（佐藤郁哉）、「第6章 調査屋の心構え——産業社会学とフィールド調査」（川喜多喬）、「地域研究の経験則——タイ企業研究から学んだこと」（末廣昭）、「エピローグ 知的創造としてのフィールド・リサーチ」（洞口治夫）で構成される。まさに現代日本を代表する「現場の達人」というべき錚々たる面々が、それぞれの調査研究活動体験や自らの信条等を語ったものである。

たしかに各章で述べられている内容は、個性豊かで魅力に溢れており、出張の合間に断片的な時間を捻り出して拾い読みするには格好の書である。

川喜多喬の「調査は稼げる。稼ぎに溺れて、学者ではなくなっている先生もいます。研究室を商店としている教授がいるのです。調査をやって政策に追従すると補助金が出るので、金儲けするために調査をするシンクタンクも多いのです」のくだりを、帰途の新幹線車中で読んだときは、思わずビールを噴き出しかけたくらいである。

また、和田充夫のいう次のエピソードなど、印象



●日本経済新聞社

2006年1月刊

A5判・264頁・2940円  
(税込)

●こいけ・かずお 法政大学大学院イノベーション・マネジメント研究科教授。  
●ほらぐち・はるお 法政大学大学院イノベーション・マネジメント研究科教授。

に残る指摘が随所に満ちあふれていて、好奇心を満たしてくれる書であることは間違いない。

「ハーバード大学の学部には経営学部がありません。『なぜ経営学部がないのか』と友人に尋ねると、『高校を出てきたばかりで、ビジネスの経験もない学生に経営を教えたら、全く意味がないよ』といわれました。

経営というものは実践とともにあるものだから、実践の中でインタラクションしながら学んだり働いたりした、そういう人たちを訓練しなければ全く意味がないのだ、というようなことをいっていたのです」

そして帰宅後、私は本書を机の片隅に埋もれさせていたのであるが、いかなる巡りあわせからか「この本について、読書ノートを書け」とのお話をいただいていたのである。それで慌てて、再度読み返してみても、はたしてこの書全体を通じて明らかにされたことは何であろうかと考え出したとき、各氏の手法や考え方が独自性・多様性に富み、かつトップレベルの成果を生み出していることは衆人の認めるところであるが、それゆえに全体像・共通性を語ることは至難の業であると悟り、締切り寸前まで悩む羽目になってしまった。

本書は、「調査の達人」に関する調査研究といえるが、そこから得られた知見は何であろうか。出口が見えないので、洞口のエピローグから、そのまま

引用してみよう。その第一は「各教授は、例外なく言語能力に優れていることである。外国語に優れているばかりでなく、日本語の運用能力においても秀でている」、第二は「各教授が、すばらしいエンターテイナーであったことである。聞く人を惹きつけて放さない『語り口』の魅力があった」、第三は「本書が、学者という職業に関するオーラル・ヒストリーになっていることである。(略) 研究の方法を語ることは、研究者の生涯を語ることにつながっていく」であるという。

このまとめ方に異論はないが、率直に言ってそれは本書を読む以前から多くの読者が知っていたことでもある。むしろ、「それぞれの章が案外に具体的な聞き方、観察方法を語っていない」とか「文献、文書資料、統計などを尊重し、重視している」とい

う小池和男の指摘のほうが、後進の研究者には示唆となる要素が隠されているように思われる。「数少ない調査事例からいかに一般化できるか、一見主観的な聞き取りの答えから、いかに客観的で他に対して説得的なものを引き出せるか」という課題に挑戦し成果を挙げている達人たちから、いったい何を盗みだせるかである。

おそらく、その「解」は読み手の研究(調査)目的や資質・性向によって一様ではなく、自らも実践することを通じて検証していく以外にはないのではないだろうか。本書は、そのためのマニュアルではないがヒントに満ちた本であり、単なる「読み物」としての価値を超えるかどうかは、読者の能力・意欲・実践力にかかっている。